ピカソの人物画

Picasso

Human Figures

ごあいさつ

20世紀を代表する芸術家パブロ・ピカソ（1881－1973年）は、何よりも「人」を描いたことで知られます。彼は、生と死、戦争と平和、愛と欲望といった私たちを取り巻くあらゆるテーマや感情に向き合い、強い存在感を放つ人間の姿を描き続けました。本展は、ピカソの人物画に焦点を当てることで、この芸術家の核心に迫ろうとするものです。

ピカソは、母国スペインの美術学校における写生デッサンの訓練を通して、人体を正確に把握し再現するための基礎を築きました。独学で学んだカリカチュアの手法は、ピカソの人物像におけるユーモラスな誇張や単純化、デフォルメの表現に生かされます。一方キュビスムの発明は、理想的な人体美の伝統を根底から覆し、人物画を新たな造形実験のための場へと転換させました。

ピカソの人物画の主題は、初期には社会から疎外された人々、両大戦間には古典古代、晩年には「画家とモデル」など多岐に及びますが、生涯にわたり中心的な位置を占めたのは肖像画です。それらの多くは従来のような注文制作ではなく、家族や友人、恋人たちを自由に描いたものでした。ピカソはとりわけ、最も身近な存在であった女性たちを、技法やスタイルを変えながら何度も取り上げています。そして1枚の絵には集約できない一人の人物の多面性や彼女らに向けられた自身の変化する感情を、一連の肖像画を通して表現しました。

本展は、近年多数の寄託作品により拡充された当館のピカソ・コレクションをまとめて紹介するまたとない機会となります。さらに国内の美術館のご所蔵品若干数を加えた絵画、素描、版画、資料など合計34点を通して、画家の青年期から晩年に至る人物画の表現と主題、その革新性と多様性をご覧いただきます。

最後になりましたが、貴重な作品をご寄託いただきました井内コレクションに心より御礼申し上げます。また、同じく貴重なご所蔵品をご出品くださいました東京ステーションギャラリー、東京国立近代美術館、ならびにご協力賜りました関係各位に深謝いたします。

国立西洋美術館

Greeting

It can be said of Pablo Picasso (1881－1973), the great master of 20th-century art, that he was first and foremost a painter of “people.” He was constantly creating human figures imbued with a strong presence, while confronting universal themes and emotions such as life and death, war and peace, love and desire. By focusing on Picasso’s figure works, this exhibition seeks to penetrate to the core of his art.

The formal training in drawing Picasso received in his native Spain equipped him from an early age with the skills needed to accurately grasp and reproduce the human form. To this grounding he added a self-taught technique of caricature: humorous exaggeration, simplification, and deformation in the depiction of figures. Subsequently, his invention of Cubism upended the traditional ideal of human beauty, turning figure painting into a new arena for artistic experimentation.

His journey in figure painting traversed a wide range of interests, including socially marginalized people (in the early period), subjects from classical antiquity (between the wars), and the Painter and Model theme (in later years). Throughout his career, however, portraiture held center stage. Many of his portraits were not conventionally commissioned works but personal projects: representations of family members, friends, or lovers. Above all, he repeatedly depicted the women closest to him, adopting different techniques and styles, building up multifaceted impressions that also expressed changes in his own feelings toward them, impossible to convey in a single image.

This exhibition provides a unique opportunity to showcase an important component of our Picasso collection, one that has expanded in recent years due to the depositing of numerous additional items with the museum. Supplemented by several pieces sourced from other Japanese institutions, the 34 figure works on display—paintings, drawings, prints, and documents—illustrate, in all their innovative power and diversity, the many themes and forms of expression pursued by the artist, from his youth to his maturity.

We wish to express our sincere gratitude to Iuchi Collection for depositing their valuable items with the museum. We also extend our heartfelt thanks to Tokyo Station Gallery and the National Museum of Modern Art, Tokyo for lending precious works from their collections and to the many others who have assisted in bringing this exhibition to fruition.

The National Museum of Western Art

1

友人たちの肖像――「四匹の猫」初個展（1900年）

1895年に家族でバルセロナに移り住んだピカソは、やがて美術教師の父親が奨励したアカデミックな教育と決別し、1899年からカフェ「四匹の猫」に出入りするようになります。バルセロナの若き芸術家や知識人の溜まり場だったこの店は、当時最先端の芸術潮流「ムダルニズマ（近代主義）」の実践と発信の場でもありました。1900年2月、ピカソはここで初めての個展を開催します。「四匹の猫」の創設者の一人で、前年10月に木炭による肖像画シリーズを発表し大きな成功を収めていた画家ラモン・カザスに対抗して、ピカソもまた約150点もの肖像デッサンを展示しました。しかし、カザスがバルセロナの社交界の名士たちを描いたのに対し、ピカソがモデルとしたのは自身の芸術家サークルの友人や知人――その多くは無名のボヘミアンたちでした。法律を学ぶ学生だったリュイス・アレマニ（no. 2）と、医師のマヌエル・リバス・イ・カレラス（no. 1、8月12日まで展示）を描いた2点の肖像は、この個展で展示されたと考えられる作品です。いずれも、木炭の素早く力強い筆致でモデルの風貌を的確に捉えるのみならず、彩色された逸話的な背景も相まって、彼らのアイデンティティや人となりまでも伝えるようです。

2. パブロ・ピカソ《リュイス・アレマニの肖像》1899 -1900年｜国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）

2

周縁化された人々へのまなざし

1900年10月のパリ初訪問から1904年4月に同地に移住するまでの時代、ピカソはバルセロナとパリを行き来する生活の中で、最初の独自の様式の確立へと向かいます。暗い青色が絵画を支配したことから一般に「青の時代」と呼ばれるこの一時代は、親友の画家カルラス・カザジェマスの自殺を一つの契機に、貧困や孤独に苦しみながら社会の底辺を生きる人々が繰り返し描かれました。この時代を代表する版画作品《貧しき食事》(no. 5) では、質素な食卓につく盲目の男性と寄り添う女性の痩せこけ、細長く誇張された身体表現が、二人の置かれた悲惨な境遇を物語っています。

パリでの新しい生活は、ピカソの絵画を沈鬱な青から柔らかなバラ色へと変化させ、1905年には続く「バラ色の時代」へと移行します。しかし、サーカスの軽業師や道化師、そして放浪の旅芸人サルタンバンクの家族といったこの時期の主題には、なお「青の時代」の名残が見られます。彼ら／彼女らもまた社会から疎外され、周縁化された人々であり、パリでは異邦人であったピカソが自らの境遇を重ねた存在でもありました。画家は、彼ら／彼女らの華やかな舞台ではなく、《サルタンバンク》(no. 7) に見るような舞台裏でのささやかな日常的光景に目を向けています。

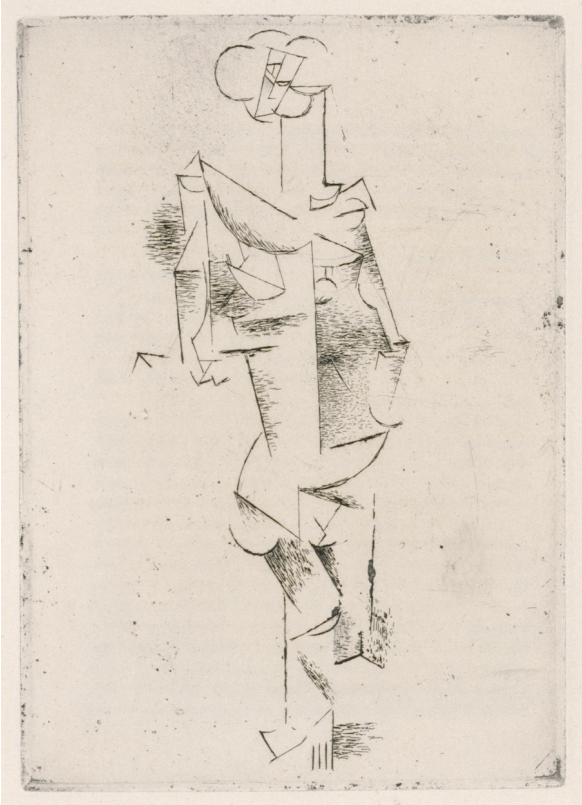
5. パブロ・ピカソ《貧しき食事》1904年（1913年刷り）｜国立西洋美術館

3

キュビスムの幾何学的身体

1906年夏頃から、ピカソはそれまでの物語性に富んだ象徴主義的な表現を捨て、その関心を主題よりも人物像の造形的探求へと向けていきます。1907年、画家は古代イベリア彫刻とアフリカの造形物の発見を経て、《アヴィニョンの娘たち》（ニューヨーク近代美術館）によって伝統的な人体美の規範に挑戦を突き付けました。そして翌年にはジョルジュ・ブラックとともに、全く新しい絵画の方法を追求する「キュビスム」の実験を開始します。この時代、ピカソの人物像は、非人間化と言えるほどの幾何学的抽象化が極限まで推し進められました。

1910年の夏、詩人マックス・ジャコブの著作『聖マトレル』の挿絵として制作された一連の版画（no. 8は8月12日まで、no. 9は8月13日から展示）は、「分析的キュビスム」と呼ばれる時期の代表作です。ここでは、直線や円弧からなる断片的な面と、細かな線の集積で表された陰影の交錯から、女性の姿を読み取ることが求められます。一方、1914年に制作された《帽子を被った男性》（no. 11）は、つづく「総合的キュビスム」への移行を示す作品で、1947年に再版されたキュビスムの2人の画家による著作『キュビスムについて』に収録されたものです。様々な幾何学的な平面を組み合わせて男性の頭部が表されており、画面上部の曲線的なフォルムは帽子を、中央の白い面に描かれた弧と斜線の組み合わせは目と鼻を暗示しています。



8. パブロ・ピカソ《レオニー嬢、マックス・ジャコブ著『聖マトレル』より》1910年（1911年刊）｜東京国立近代美術館

4

バレエ・リュス

1914年に第一次世界大戦が勃発して以降、孤独や経済的な危機といった様々な困難に直面していたピカソに大きな転機が訪れます。1916年、ピカソは当時パリで一世を風靡していたバレエ・リュス（ロシア・バレエ団）の演目『パラード』の舞台美術と衣装デザインを引き受けます。1917年5月に『パラード』がスキャンダラスな成功を収めた上、ピカソがダンサーの一人、オルガ・コクローヴァと結婚したことで、彼はバレエ・リュスの中心的な芸術家となり、共同制作は約10年間続きました。バレエの仕事を通して、ピカソはダンサーたちの優雅な動きやポーズ、何より人体そのものの美しさを再発見します。またバレエ団とともに訪れたイタリアをはじめとする 旅先での経験や演目のテーマから着想を得た作品を、古典的な様式で数多く描きました。

1920年、ピカソはイタリアの伝統的な即興劇コメディア・デラルテを基にしたバレエ『プルチネッラ』の製作に携わります。《青い胴着の女》（no. 13）はその関連作と考えられ、イタリアの民族衣装に典型的な彼女の白いブラウスと短い胴着は、ピカソがデザインしたバレエの登場人物の衣装とよく似ています。一方、白のゆったりとした上着に円錐形の帽子を被った《道化師》（no. 12）は、プルチネッラやアルルカンといったコメディア・デラルテに由来する様々な道化役のうち、ピエロを表した作品です。

12. パブロ・ピカソ《道化師》1918年｜国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）

5

古典古代への憧憬

戦前のキュビスムの追求から一転、1914年に突如として写実的な人物像を描き始めたピカソは、戦中から戦後にかけてフランスの美術界を支配した「秩序への回帰」の傾向に先鞭をつけました。1917年にはバレエ・リュスの仕事でイタリアに滞在したことで、ピカソの古典主義への傾倒は決定的となります。この頃から1920年代前半まで、彼はキュビスム絵画と並行して、古代彫刻や古典絵画に想を得た人物画を多く手掛けました。例えば、《泉》(no. 15) における壺(水瓶)を手にした女性たちのシンプルな長衣や量感ある人体表現は、古代の彫像を想起させます。《三人の女》(no. 16) と《三人の浴女》(no. 17) では、女性たちの顔つきはどこか現代風ではあるものの、古代神話に登場する「三美神」の図像を参照しているのは明らかです。

一方1930年代に入ると、挿絵本や連作版画の制作を通して、ピカソは古典的な神話主題と新たに向き合います。とりわけ古代ギリシャ神話に伝わる牛頭人身の怪物ミノタウロスは、シュルレアリスムへの共鳴を背景に、獣性と人間性を併せ持つ存在として様々な姿で作品に登場します。ピカソはミノタウロスに自身を重ね合わせながら、暴力や快楽、苦悩の場面を多様に表現しました (no. 18)。

18. パブロ・ピカソ《夜、少女に導かれる盲目のミノタウロス》1934年 (1939年刷り) | 国立西洋美術館 (井内コレクションより寄託)

6

親密な肖像

1927年、ピカソはパリの街角で当時17歳のマリー＝テレーズ・ワルテルと出会います。「きみは面白い顔をしているね。きみの肖像画を描いてみたい。」マリー＝テレーズの回想によれば、ピカソは彼女にこう声をかけたといいます。ピカソのアトリエを訪れ、彼のモデルを務めるようになったマリー＝テレーズは、ほどなくして画家の愛人となります。妻子のいたピカソは彼女との関係を隠し続けますが、1928年の《顔》(no. 19) には早くも、画家を魅了したこの新たな恋人の鼻筋の通った「ギリシャ風の横顔」が登場します。大胆なクローズアップの構図は、モデルの顔のほんの一部を観者に垣間見せるも、その全体像は明かさず、彼女を包む影と相まってミステリアスな雰囲気を助長しています。思わず手で触れたくなるほどの顔の近さと柔らかなタッチは、画家とモデルの親密さを物語っているようです。

1935年、ピカソとマリー＝テレーズとの間に娘マヤが誕生します。ピカソは妻オルガと以後別居するも、離婚には至りませんでした。そのため彼がマリー＝テレーズ母娘と正式に家族になって共に暮らすことはありませんでしたが、彼女たちと定期的に会い、幼い娘の成長の記録を描き留めています (no. 20)。

19. パブロ・ピカソ《顔》1928年｜国立西洋美術館

7

戦時下の肖像

第二次世界大戦の勃発とともに多くの前衛芸術家が亡命や疎開を選んだのに対し、ピカソはナチス・ドイツに占領されたパリに留まり、過酷な状況下で制作を続けました。パリ占領時代の1942年に描かれたこの2点の女性像は、いずれもシュルレアリスムの写真家で、1936年から公私にわたるピカソのパートナーであったドラ・マールの肖像画です。

《小さな丸帽子を被った座る女性》(no. 21) は、暗い色調や歪な身体表現が戦時下の抑圧的で重苦しい状況を反映する一方、ドラの強いまなざしと大きな手、洗練された装いで肘掛け椅子に堂々と座る姿は、抑圧の中でも失われることのない人間の尊厳や抵抗を象徴しているかのようです。しかしその4ヶ月後に描かれた《女性の胸像》(no. 22) では、ドラは見る影もなく激しく変形されています。目を見開き、歯をむき出しにして悲痛の表情を浮かべるその頭部は、戦争における暴力と、不安や恐怖をより直接的に喚起します。

戦時下の目まぐるしく変容するドラの一連の肖像は、モデルの似姿を留めるという従来の肖像画の概念を明らかに超越しています。それらは、ピカソとドラが共有した悲惨な状況や強烈な感情を映し出す、主観的で心理的な肖像画なのです。

22. パブロ・ピカソ《女性の胸像》1942年 | 国立西洋美術館 (井内コレクションより寄託)

fig. 1
パブロ・ピカソ《小さな丸帽子を被った座る女性》1942年

fig. 2
可視光画像の上に、X線透過画像で判明した構図を白色の線で、赤外線反射画像で判明した構図を緑色の線でそれぞれ示した。

fig. 3　X線透過画像

fig. 4　赤外線反射画像

《小さな丸帽子を被った座る女性》科学調査ノート

2024年に本作（no. 21）のX線透過画像を撮影したところ、もともとこの女性像は小さな丸帽子ではなく、中央に2つの円状の飾りがついた、大きなつば広帽子を被っていたことが判明しました［figs. 2, 3］。この塗りつぶされた帽子の部分について、さらに蛍光X線分析による絵具調査を実施したところ、帽子のつばの色彩はカドミウムイエローやカドミウムレッド、中央の円模様は主にシルバーホワイトを含んでいたと推測でき、変更前の帽子は明るい色調であったと考えられます。つまり、ピカソは明るい色の大きな帽子からグレーの小さな帽子に描き直したことで、本作の暗い色調の画面に統一感をもたらしつつ、モデルのドラ・マールに厳粛でつつましい雰囲気を与えたと言えるでしょう。

X線透過画像をさらによく見てみると、女性の右頬側や右手の下にも何かが描かれていた痕跡が認められます［figs. 2, 3］。また、同画像で女性の口の周りが暗く写っていることから、肉眼では白っぽく見えるこの部分は、白絵具が塗られているのではなく、白い地塗り層が露出した状態であることが分かりました。

一方、同時期に撮影した赤外線反射画像からは、制作過程で塗りつぶされたいくつかの線が明らかとなり、とりわけ女性の左肩付近が大きく描き直されているのが見て取れます［figs. 2,4］。

以上の科学調査は、描き直しや塗りつぶし、あえての塗り残しなど、肉眼では知り得ないピカソの制作における試行錯誤のプロセスを伝えています。

※本調査は、当館保存科学室長の髙嶋美穂によって実施されました。蛍光X線分析は、東京電機大学助教・阿部善也と明治大学助教・村串まどかの協力によるものです。

8

戦後の様式化された頭部

1945年の終戦により、ついに平和の時代が到来します。ピカソは自らの生活環境と芸術を刷新すべく、戦後の拠点を南仏に移し、陶芸のような新たなジャンルや、美術史上の名作に基づく連作のような新たな主題にも挑戦しました。一方で、人間の顔や身体の表象そのものに対するピカソの強い関心は戦前から一貫しており、とりわけ女性の頭部や胸像における表現の可能性を探求し続けました。

同じ女性を描いた3点の作品は、ピカソが一人の人物を、それぞれ異なる技法と造形言語を用いて、いかに多様に表現したかを伝えています。モデルは若き画家で、1943年にピカソと出会い、1946年から53年まで彼と生活をともにしたフランソワーズ・ジローです。《ヘアネットの女性》(no. 23) では、彼女の顔はほぼ左右対称の正面観で、いくぶん再現的に描かれている一方、丸みを帯びた髪と衣服は装飾的に処理されています。対照的に、横向きで表された《窓辺の女性》(no. 24) は、キュビスムに由来する幾何学的な面に分割されています。《赤い胴着》(no. 25) では、正面観の頭部に、前向きと横向きの目が組み合わされ、鼻と口も別々の方向に歪められています。こうした顔の非対称性や歪曲は、この後ほどなくしてピカソの元を去るフランソワーズの内面の葛藤を暗示しているかのようです。

23. パブロ・ピカソ《ヘアネットの女性》1949年 | 国立西洋美術館 (井内コレクションより寄託)

9

「画家とモデル」──飽くなき探求の果て

1961年、80歳を手前にジャクリーヌ・ロックと再婚し、終の棲家となる南仏ムージャンに移り住んだピカソは、アトリエという閉ざされた世界に引きこもるようになります。そのような隠遁生活と軌を一にして、ピカソ最晩年の作品群は、自らの原点や芸術創造の根源的な問題と向き合う、より内省的なものとなっていきました。とりわけ「画家とモデル」の主題は、裸でポーズを取る女性モデルを前に男性画家が制作に励むアトリエの情景や、モデルあるいは画家の単身像など数多く描かれます。画家の姿は、ピカソ自身が重ねられることもあれば、彼が敬愛する過去の巨匠たちの作品から抜け出してきたような風貌や身なりで表されることもありました。例えば、《1968年3月29日 I》(no. 32)のスペイン風の衣装を着た画家は、エル・グレコの絵画の登場人物を想起させます。

わずかな例外を除き常にモデル＝恋人だったピカソにとって、この主題はまた、男女の性愛と深い関わりを持つものでした。そうした意味で、もつれ合う裸の男女を力強く描いた大作《男と女》(no. 34) は、「画家とモデル」の延長線上にあると言えるでしょう。ピカソ芸術の原動力となった「愛」と、人間の溢れんばかりの生命力を体現した、老年のピカソの境地を示す人物画です。

32. パブロ・ピカソ《1968年3月29日 I》1968年 | 国立西洋美術館（山本英子氏より寄贈）

ピカソの人物画
Picasso
Human Figures

2025.6.28 [Sat.] – 10.5 [Sun.]

［凡例／ Notes］

- 出品作品はnos. 3, 4, 14を除いてすべてパブロ・ピカソ（1881年－1973年）作です。
  All the works are by Pablo Picasso (1881–1973), except for item nos. 3, 4 and 14.
- 作品データは原則として所蔵先から提供された資料に基づきます。
  各データは、作品番号、作家名・生没年（ピカソを除く）、作品名、制作年、技法・材質、所蔵先、所蔵番号（英のみ）の順に和英で記しています。
  Data on the works is based on information provided by the owners. It is listed in both Japanese and English in the following order: number, artist/ date of birth and death (except Picasso), title, date, technique and material, location and inventory number (only in English).
- 会期中、一部の作品の展示替えを行います。展示期間は以下の通りです。
  Some displayed works will be changed during the course of the exhibition. The display schedule is as follows.
  nos. 1, 8: 6/28 [sat] - 8/12 [tue]; nos. 9, 28: 8/13 [wed] - 10/5 [sun]

1
友人たちの肖像――「四匹の猫」初個展（1900年）
Portraits of Friends: First Solo Exhibition (1900)

1
座る若い男
1899年
木炭・水彩／紙
東京ステーションギャラリー
Portrait of Manuel Ribas i Carreras
1899
Charcoal and watercolour on paper
Tokyo Station Gallery

2
リュイス・アレマニの肖像
1899-1900年
グアッシュ・木炭／紙
国立西洋美術館
井内コレクションより寄託
Portrait of Lluís Alemany
1899-1900
Gouache and charcoal on paper
The National Museum of Western Art
Deposited by Iuchi Collection
DEP. 2023-0009

3
ラモン・カザス
（1866年－1932年）
ペラ・ロメウと四匹の猫
1897年頃
鉛筆・インク／紙
国立西洋美術館
Ramon Casas
(1866 – 1932)
Pere Romeu and Four Cats
ca. 1897
Pencil and ink on paper
The National Museum of Western Art
D. 2018-0001

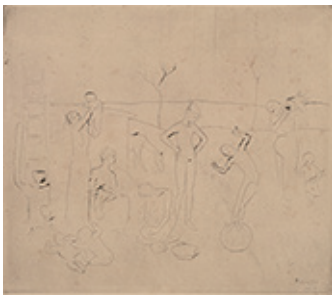
4
「四匹の猫」での展覧会パンフレット
1897年
国立西洋美術館
Pamphlet for the exhibition at the Quatre Gats
1897
The National Museum of Western Art

2
周縁化された人々へのまなざし
Gazing at the Marginalized

5
貧しき食事
1904年（1913年刷り）
エッチング
国立西洋美術館
The Frugal Repast
1904, printed 1913
Etching
The National Museum
of Western Art
G. 2001-0016

6
貧しき人々
1905年（1913年刷り）
エッチング
国立西洋美術館
The Poor
1905, printed 1913
Etching
The National Museum
of Western Art
G.1998-0074

7
サルタンバンク
1905年（1913年刷り）
ドライポイント
国立西洋美術館
Saltimbanques
1905, printed 1913
Drypoint
The National Museum
of Western Art
G.1966-0001



3
キュビスムの幾何学的身体
The Geometric Human Body of Cubism

8
レオニー嬢
マックス・ジャコブ著『聖マトレル』より
1910年（1911年刊）
エッチング
東京国立近代美術館
Mademoiselle Léonie from
Saint Matorel by Max Jacob
1910, published 1911
Etching
The National Museum of Modern Art,
Tokyo

9
長椅子のレオニー嬢
マックス・ジャコブ著『聖マトレル』より
1910年（1911年刊）
エッチング
東京国立近代美術館
Mademoiselle Léonie
in Lounge Chair from *Saint Matorel*
by Max Jacob
1910, published 1911
Etching
The National Museum of Modern Art,
Tokyo

10
男の頭部
1912年
エッチング
国立西洋美術館
Head of a Man
1912
Etching
The National Museum
of Western Art
G. 2003-0122

11
帽子を被った男性
アルベール・グレーズ、
ジャン・メッツァンジェ著
『キュビスムについて』より
1914年（1947年刊）
エッチング
国立西洋美術館研究資料センター
Man with a Hat from *Du Cubisme*
by Albert Gleizes and
Jean Metzinger
1914, published 1947
Etching
The Research Library,
The National Museum of Western Art

4
バレエ・リュス
Ballets Russes

12
道化師
1918年
鉛筆／紙
国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）
Pierrot
1918
Pencil on paper
The National Museum of Western Art
Deposited by Iuchi Collection
DEP. 2023-0008

13
青い胴着の女
1920年
鉛筆・水彩・グアッシュ／紙
国立西洋美術館（松方コレクション）
Woman with a Blue Bodice
1920
Pencil, watercolour and gouache on paper
The National Museum of Western Art
Matsukata Collection
D.1959-0044

14
『バレエ・リュス公式プログラム』1920年12月
国立西洋美術館研究資料センター
Programme officiel des Ballets Russes,
December 1920
The Research Library,
The National Museum of Western Art

5
古典古代への憧憬
Toward Classical Antiquity

15
泉
1921年（1929年刷り）
ドライポイント・ビュラン
国立西洋美術館
The Fountain
1921, printed 1929
Drypoint and burin
The National Museum of Western Art
G.1970-0017

16
三人の女
1922年
エッチング
国立西洋美術館
The Three Women
1922
Etching
The National Museum of Western Art
G.1967-0002

17
三人の浴女
1922-23年
ドライポイント
国立西洋美術館
The Three Bathing Women
1922-23
Drypoint
The National Museum of Western Art
G.1967-0003

18
夜、少女に導かれる盲目のミノタウロス
1934年（1939年刷り）
アクアティント
国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）
Blind Minotaur Led by a Little Girl in the Night
1934, printed 1939
Aquatint
The National Museum of Western Art
Deposited by Iuchi Collection
DEP. 2023-0006

6
親密な肖像
Intimate Portraits

19
顔
1928年
リトグラフ
国立西洋美術館
Face
1928
Lithograph
The National Museum of Western Art
G.1977-0003

20
画家の娘
1942年
鉛筆／紙
国立西洋美術館（山本英子氏より寄贈）
The Daughter of the Artist
1942
Pencil on paper
The National Museum of Western Art
Donated by Ms. Eiko Yamamoto
D.1990-0005

7
戦時下の肖像
Portraits in Wartime

21
小さな丸帽子を被った座る女性
1942年
油彩／カンヴァス
国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）
Seated Woman with a Small Round Hat
1942
Oil on canvas
The National Museum of Western Art
Deposited by Iuchi Collection
DEP. 2022-0025

22
女性の胸像
1942年
油彩／板
国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）
Bust of a Woman
1942
Oil on panel
The National Museum of Western Art
Deposited by Iuchi Collection
DEP. 2023-0002

8
戦後の様式化された頭部
Stylized Heads of the Postwar Period

23
ヘアネットの女性
1949年
カラー・リトグラフ
国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）
Woman with a Hairnet
(Green Haired Woman)
1949
Color lithograph
The National Museum of Western Art
Deposited by Iuchi Collection
DEP. 2023-0004

24
窓辺の女性
1952年
アクアティント
国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）
Woman at the Window
1952
Aquatint
The National Museum of Western Art
Deposited by Iuchi Collection
DEP. 2023-0007

25
赤い胴着
1953年
油彩／カンヴァス
国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）
The Red Bodice
1953
Oil on canvas
The National Museum of Western Art
Deposited by Iuchi Collection
DEP. 2023-0003

26
女性の肖像（クラーナハ（子）に基づく）
1958年
リノカット
国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）
Portrait of a Woman, after Cranach the Younger
1958
Linocut
The National Museum of Western Art
Deposited by Iuchi Collection
DEP. 2023-0005

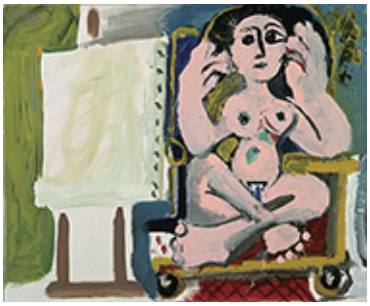
27
頭部
1962年
クレヨン／紙
国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）
Head
1962
Crayon on paper
The National Museum of Western Art
Deposited by Iuchi Collection
DEP. 2023-0010

28
無題
1972年
鉛筆・オイルパステル／厚紙
東京国立近代美術館
Untitled
1972
Pencil and oil-pastel on cardboard
The National Museum of Modern Art, Tokyo

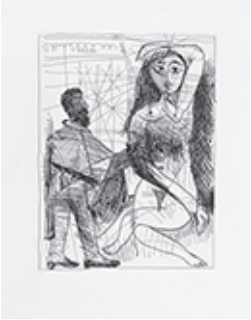
29
横たわる女
1960年
油彩／カンヴァス
国立西洋美術館（梅原龍三郎氏より寄贈）
Reclining Woman
1960
Oil on canvas
The National Museum of Western Art
Donated by Mr. Ryuzaburo Umehara
P.1978-0001

30
ジョルジュ・ブラックへのオマージュ
『デリエール・ル・ミロワール』
第144-145-146号より
1964年（1964年5月刊）
リトグラフ
国立西洋美術館研究資料センター
Hommage to Georges Braque, from *Derrière le miroir*, nos. 144-145-146
1964, published in May 1964
Lithograph
The Research Library, The National Museum of Western Art

31
アトリエのモデル
1965年
油彩／カンヴァス
国立西洋美術館（梅原龍三郎氏より寄贈）
Model in the Studio
1965
Oil on canvas
The National Museum of Western Art
Donated by Mr. Ryuzaburo Umehara
P.1974-0004



32
1968年3月29日 I
1968年
エッチング
国立西洋美術館（山本英子氏より寄贈）
29 March 1968 I
1968
Etching
The National Museum of Western Art
Donated by Ms. Eiko Yamamoto
G.1990-0037



33
1968年5月16日 VI
1968年
エッチング・ドライポイント
国立西洋美術館（山本英子氏より寄贈）
16 May 1968 VI
1968
Etching and drypoint
The National Museum of Western Art
Donated by Ms. Eiko Yamamoto
G.1990-0036

34
男と女
1969年
油彩／カンヴァス
国立西洋美術館（梅原龍三郎氏より寄贈）
Couple
1969
Oil on canvas
The National Museum of Western Art
Donated by Mr. Ryuzaburo Umehara
P.1974-0005

小企画展
ピカソの人物画
2025年6月28日［土］―10月5日［日］
国立西洋美術館
新館2階 版画素描展示室（常設展示室内）

主催
国立西洋美術館

企画
久保田有寿
（国立西洋美術館 特定研究員）

執筆・編集
久保田有寿

デザイン
木村稔将

発行
国立西洋美術館
〒110-0007
東京都台東区上野公園7-7
©2025 国立西洋美術館

Picasso: Human Figures
28 June [sat] – 5 October [sun], 2025
The National Museum of Western Art
Prints and Drawings Gallery, New Wing

Organized by
The National Museum of Western Art

Curated by
Azu Kubota
(Associate Curator, The National Museum Western Art)

Edited and text written by
Azu Kubota

Designed by
Toshimasa Kimura

Published by
The National Museum of Western Art
7-7 Ueno-koen, Taito 110-0007, Tokyo, Japan
©2025 The National Museum of Western Art

©2025 - Succession Pablo Picasso - BCF (JAPAN)

禁無断転載 All right reserved

［表紙］パブロ・ピカソ《小さな丸帽子を被った座る女性》1942年、
油彩／カンヴァス、国立西洋美術館（井内コレクションより寄託）
Cover: Pablo Picasso, *Seated Woman with a Small Round Hat*,
1942, oil on canvas, The National Museum of Western Art
(deposited by Iuchi Collection)

国立西洋美術館
The National Museum of Western Art